

〔報 告〕

術後患者の状態を再現したモデル人形を用いた演習の学び

— 「術後1日目患者の実際」のレポートから —

Learning of students after postoperative practical drill
using a human body model

— From students' reports on "Patients' condition the day after surgery" —

市川 香史 名倉 真砂美 森 京子 竹山 育恵 高橋 美和
脇坂 浩 竹本 三重子 玉田 章

【論文要旨】

本研究の目的は成人看護方法Ⅲにおける、術後1日目の患者の状態を再現した「術後患者の実際」の演習を通して、学生がどのような気づき、学びを得たかを明らかにすることである。「術後患者の実際」演習後の学生のレポートから学生の学びや気づきについて質的帰納的分析を行った。

学生の学びから、事前学習で術後患者の状況をイメージし、「見る」、「聞く」、「触れる」という感覚を使って演習を行ったことで、事前学習と演習内容が繋がったと考えられる。また、学生はモデル人形を見て、挿入されているチューブ類から【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】に気づき、そこから【患者の感覚に近づくこと】すなわち、患者の立場に立つことで術後患者をイメージしていたと考えられる。これらの過程から、【術後の観察の重要性】、【患者への説明の重要性】という2つの看護の必要性を見出していたと考えられる。

【キーワード】 術後患者の看護, モデル人形, シミュレーション学習, 看護大学生, 成人看護学

I. はじめに

2002年に文部科学省「看護学教育の在り方に関する検討会」によって「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」という報告書¹⁾が出された。この報告書の中で臨地実習は「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程で、看護実践能力を培うには極めて重要であると述べられている。その前段階と考えられる演習については、臨地実習で応用力・判断力、統合する能力を発揮するための準備である²⁾と述べられており、臨地実習でより効果的に学ぶためには、学内での講義、演習が効果的に行われる必要があると考えられる。

鈴木ら³⁾は、看護学教育において多用されている「演習」は、講義形態では修得が困難な教育内容に対して用いられる教育方法であることが考えられるが、教育内容や方法は様々であり明確な定義はない、と述べている。今日の看護学教育における演習方法として

は、模擬患者、ロールプレイ、モデル、ペーパーペイシエント、CAI、劇化、体験学習などのシミュレーション的方法が取り入れられている⁴⁾。シミュレーションとは、実際に経験することのできない状況についての学習を可能にする方法である⁵⁾。シミュレーション的方法を用いた、看護学演習に関する先行研究の内容としては、以下のものがある。①ペーパーペイシエントを使った看護過程の展開でグループワークやゼミ方式などの教育方法に関する研究^{6)~8)}、②看護過程展開の授業において事例を理解しやすくするために、模擬患者や学生間でのロールプレイ、事例の疾患と同じ患者の講演会等を活用した看護過程の演習全体を示した実践報告^{9)~11)}、③模擬患者やモデル人形への観察を行う、看護師役、患者役で援助場面のロールプレイを行う等の看護実践の学習効果に関する研究^{12)~15)}、④演習に必要な教材の工夫とその学習効果に関する研究¹⁶⁾、⑤疑似体験学習の学習効果に関する研

Kafumi ICHIKAWA : 三重県立看護大学成人看護学
Ikue TAKEYAMA : 三重県立看護大学成人看護学
Mieko TAKEMOTO : 三重県立看護大学成人看護学

Masami NAKURA : 三重県立看護大学成人看護学
Miwa TAKAHASHI : 三重県立看護大学成人看護学
Akira TAMADA : 三重県立看護大学成人看護学

Kyoko MORI : 三重県立看護大学成人看護学
Hiroshi WAKISAKA : 三重県立看護大学成人看護学

究¹⁷⁾である。このように、看護学教育においてシミュレーション的方法を用いた演習は、様々に取り入れられている。

本学の成人看護学においても、モデル人形に点滴やドレーン・カテーテル類、排液バッグ、酸素マスク等を装着して術後患者の実際の状態を再現し、それを見せながら、教員が学生に説明する「術後1日目患者の実際」（以下、「術後患者の実際」）という演習を行っている。この演習は、3年次前期の成人看護方法Ⅲにおいて、直腸切除術後患者の紙上事例を用いた看護過程展開の授業の初めに、事例患者の状態を理解しやすくするために行っているが、先行研究にはこのような方法を用いた演習の報告は見当たらなかった。また、本学でもこれまで、この演習によって学生がどのような学びを得ているのかについて、研究的な取り組みを行っていなかった。したがって、本研究では、この演習「術後患者の実際」において学生がどのような学び、気づきを得たかについて明らかにすることを目的とし、その成果を今後の教育評価の一助としたいと考えた。

II. 演習「術後患者の実際」の学習目標と演習方法

「術後患者の実際」演習の学習目標として、①術後の患者の状況をイメージし、患者の身体的・精神的状態と生活について考えることができる、②事前学習をふまえて、患者に挿入、装着されているドレーンやカテーテル類の必要性およびその看護について考えることができる、を提示して演習を行った。

「術後患者の実際」演習の方法は、モデル人形に酸素マスクや点滴、ドレーン、カテーテル類、排液バッグ等を装着することで術後患者の実際の状態を再現し、その場面について教員が説明を行った後、最後にグループで術後患者の身体的、精神的状態と生活に及ぼす影響について話し合うものである。学生はこの「術後患者の実際」演習の前に、事例内容を読んで患者の様子をイメージして図に描くことと、事例患者に装着（挿入）されているドレーンやカテーテル類の必要性と看護について学習するよう事前学習課題を与えられる。「術後患者の実際」の演習当日は、12～13人ずつのグループに分かれ、教員1名が1体のモデル人形を用いて、モデル人形に挿入されているドレーンやカテーテル類、装着されている医療機器の目的や

方法を説明する（写真1）。学生は事前学習で描いたイメージ図をもとに、教員の説明を聞きながら、モデル人形を実際に見て、ドレーン、カテーテル類に触れて演習を行う。イメージ図は、学生が思い通りの理解のもとに患者の身体から様々なドレーン・カテーテル類が出ている様子を描いたものである。演習後には、「術後1日目患者の実際」の授業後の学び・感想のレポートを、A4用紙1～2枚程度にまとめ提出する。



写真1 演習風景

III. 研究方法

1. 調査対象

本学3年生で成人看護方法Ⅲの履修者99名のうち研究協力が得られた63名の「術後1日目患者の実際」の授業後の学び・感想のレポートを調査対象とした。

2. 調査方法

1) 調査協力の依頼方法

本学3年生で成人看護方法Ⅲの履修者99名に対し、当該科目の全ての授業回数が終了し、さらに主担当教員が本科目の成績評価を判定し、事務局へその結果を提出した後に、口頭と文書により研究参加の依頼をした。文書には研究目的、内容、方法、データの慎重な取り扱いと匿名性の保持、研究参加の自由意思の尊重について明記した。研究協力に同意する場合は、後日同意書に署名し、所定の場所にレポートとともに提出するよう説明した。

2) 分析方法

「術後1日目患者の実際」の授業後の学び・感想のレポートから、学生が気づいたこと、考えたことについて記述した箇所を文章で抽出し、研究者間で十分に読み込んだ後、それぞれに類似した意味内容ごとに分

類した。さらにそれらのまとまりの意味や関連性を考え、その内容に沿ってネーミングした。分析過程においては、質的研究者のスーパーバイズ受けながら進めた。

3. 倫理的配慮

本研究は三重県立看護大学倫理審査会に審査を申請し承認を得た。本調査においては研究者が本学教員であり、研究協力者が本学学生である。そのため、学生が研究に協力することで、学業遂行が妨げられないようにすること、成績評価および、学校生活とは無関係であること、研究に参加する本人の自由意思に基づいて決定し、辞退したとしても成績評価等に不利益を被ることがないことを説明した。また、学生には説明後、研究協力について再考する期間を与え、同意が得られた場合に限り、同意書とともにレポートを提出してもらった。提出されたレポートは名前を伏せてコ

ピーし、データとして使用したが、個人情報保護に留意し慎重に扱った。

IV. 結果

「術後患者の実際」の演習を通して、学生が学んだ内容について分析した結果を表1に示す。結果は次の4つの学びに大別された。1.【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】2.【患者の感覚に近づくこと】3.【術後の観察の重要性】4.【患者への説明の重要性】である。以下、大項目を【 】, 小項目を< >, 学生の記述内容を小さい文字で「 」に表記する。

1. 【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】

学生は術後を再現したモデル人形を見て、教員の説明を聞き、実際にチューブ類に触れることで、事前学

表1 「術後患者の実際」の演習を通して学生が得た学び

抽出された大項目	小項目
1. 「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際	チューブ類の太さ、硬さが自分の想像と違う チューブ類は自分の想像していた以上に多く、複雑に挿入されている 医療器具は、患者に安全で負担の少ないように、処置しやすいようにできている チューブ類は患者に負担のないように、抜けにくいようにテープ、ガーゼで固定されている
2. 患者の感覚に近づくこと	術後患者はチューブの挿入によって身動きがとれない 術後患者はチューブの挿入によって苦痛や違和感がある 術後患者は手術を受けたことによって不安を抱く 術後患者は自分の体のどこにどのようなチューブが挿入されているか見えない
3. 術後の観察の重要性	術後に循環や呼吸状態を観察する目的、観察の仕方 水分のイン-アウトバランス把握の目的 術後に創部の回復過程を理解する目的、術創部の観察の仕方 術後に腹腔ドレーンからの排液を観察する目的、観察の仕方 チューブ類の挿入状況の観察の仕方 静脈留置カテーテルの観察の仕方
4. 患者への説明の重要性	術後にチューブ類が挿入されている目的、部位、留置期間 術後に挿入されるチューブ類のベッド上での配置場所 早期離床の目的 清潔や食事等の日常生活、および手術部位の回復に関する術後の経過 術前の説明 術後の回復過程に関する説明 麻酔の副作用に関する説明 術中や術後の状態に関する説明 術後にチューブが挿入される目的や留置期間、実際の状況に関する説明 術後に装着する器具に関する説明

習でイメージした内容と比較し、様々なことに気づいていた。

1) <チューブ類の太さ、硬さが自分の想像と違う>

学生は、事前学習でイメージしてきたことと比べ、チューブ類の太さ、硬さが違ってたと捉えていた。例として、「硬膜外麻酔カテーテルは思っていたよりもずっと細く、柔らかい；吻合部ドレーンを触ってみると、かなり柔らかい素材で、想像していた膀胱留置カテーテルの硬さとは違っていた；実際に触って分かった、チューブの硬さがそれぞれに違うこと」と記述されていた。

2) <チューブ類は自分の想像していた以上に多く、複雑に挿入されている>

学生は、事前学習でイメージしてきた患者の様子と比べ、チューブ類が多く複雑に挿入されているように感じていた。

例としては、「自分のイメージよりもルートが複雑であったり、ベッド周囲に様々なバッグが固定され機器が多い；実際にモデル人形を見てみると、思っていたよりもドレーンが多く感じ、患者も同様に感じるのではないかと書かれていた。

3) <医療器具は、患者に安全で負担の少ないように、処置しやすいようにできている>

学生は、患者に用いられている硬膜外カテーテルや静脈留置カテーテル等の医療器具が、患者に安全で負担が少なく、また医療者が処置しやすいようにできていると捉えていた。

例としては、「静脈留置針や硬膜外麻酔カテーテルなど、長期間にわたって体内に留置するカテーテルや針は素材が柔らかいものになっていて、日常生活の中で血管内を傷つけないような構造になっていること；チューブ類で身体に直接挿入してある部分のものは、柔らかい素材でできていて、なるべく負担にならないようになっていること；静脈留置針は、透明のテープでとめて穿刺した部分を観察することができるようにすること」があげられていた。

4) <チューブ類は患者に負担のないように、抜けにくいようにテープ、ガーゼで固定されている>

学生はチューブ類の固定が、患者に負担のないように、抜けにくいように、テープやガーゼを使って工夫

されていると捉えていた。

例としては、「どのチューブも皮膚に直接チューブがあたらないように、チューブの下にテープなどの土台を貼った上にとめる必要がある；持続硬膜外麻酔時にチューブを背骨を避けて固定し、患者さんの苦痛を軽減する；皮膚にドレーンがあたらないようにYガーゼを用いる；カテーテルと鼻翼との接触により、皮膚に圧迫潰瘍ができないようにするために、テープでチューブを巻いて直接チューブと皮膚が接触しないように工夫してある」と述べられていた。

2. 【患者の感覚に近づくこと】

学生は術後を再現したモデル人形を見て、手術を受けた患者の立場に立って、術後の患者の状態をイメージしていたことが分かった。

1) <術後患者はチューブの挿入によって身動きがとれない>

学生は患者の立場に立って考えた時、術後患者にはドレーンやカテーテル等のチューブが挿入されているため、動きづらいのではないかと捉えていた。

例として、「体のいたるところからチューブが出ている状態であり、動くことによってカテーテルが外れたり、体の下敷きになってしまうのではないかと考えてしまい、もし疼痛がなかったとしても、1人では動きづらい状態である；チューブがたくさんあって身動きがとれなさそう」と記述されていた。

2) <術後患者はチューブの挿入によって苦痛や違和感がある>

学生は術後患者が身体にチューブを挿入されていることで、苦痛や違和感があると患者の立場に立ってイメージしていた。

例として、「非常に数多くのドレーン・カテーテル類が挿入されていて、Yさん（事例患者の名）が非常に苦痛で違和感が大きいと感じた；ドレーンを実際に触ってみて、硬膜外麻酔カテーテルは細くて柔らかかったのが、あまり気にならないかなと思ったが、胃管カテーテル、膀胱留置カテーテルは太くて硬く、体内に侵入していると考えたら違和感と不快感、皮膚のこすれやテープによる痛みなどもあるのだろう」と述べていた。

3) <術後患者は手術を受けたことによって不安を抱く>

学生は患者の立場に立つことで、患者が手術を受けたことによって、不安を抱いているのではないかと想像していた。不安の具体的な内容を捉えたものとしては、以下のような記述があった。

「鼻や腹部、背部、陰部にチューブを入れられている患者さんは、動くことができなさそうで、実際に自分がチューブを入れられていたら、チューブが外れたり絡まったり、どうにかなってしまわないかが心配で少し動くのも不安になるのではないかと思います；手術前は手術に対する不安でいっぱいだったであろうが、手術後は、本当に治るのだろうか、痛みはいつ和らぐのだろうか、等の不安もあるだろうし、入院費のことも考えて、頭の中は不安で埋め尽くされているだろう；私がYさんのような状態に置かれたならば、『チューブを早く外してほしい』、『自分はこれからどうなるのだろうか』、『もうがんは全てとれたのだろうか』、など今後の自分が想像できないために手術が終わったという安心感よりも不安感の方がはるかに大きい」

その他としては、「あんなにたくさんの管が身体から出ていたら不安だろう；術後目を覚ましてから、自分の体から多くのカテーテルが出ているのを見て、Yさんはおそらく驚き、不安を感じるだろう」など、不安を漠然と捉えたものもみられた。

4) <術後患者は自分の体のどこにどのようなチューブが挿入されているか見えない>

学生は、術後の患者が自身の体のどこにどのようなチューブが挿入されているか見えていないだろうと捉えていた。

例として、「ベッドで寝ているため、点滴くらいは見えるだろうが、ベッド柵につながれている胃管チューブや膀胱留置カテーテル、ドレーンのバッグまでは見えていない可能性がある；ベッド上でほとんど仰臥位になっているため、挿入されているドレーン・カテーテル類を自分で見て確認できないので、現在の自分の状態を自覚することが難しい」等であった。

3. 【術後の観察の重要性】

学生は事前学習や演習を通して、術後に必要な観察内容、観察する目的を捉えていた。

1) <術後に循環や呼吸状態を観察する目的、観察の仕方>

学生は術後に循環や呼吸状態を観察する目的や観察の仕方を捉えていた。

例として、「患者の異常を早期発見するために、呼吸リズムは正常であるか、尿量や尿の性状は正常であるか、血圧や脈拍などのバイタルサインもあわせてみる、腹腔ドレーンや胃管チューブの排液の性状や量を観察することで、吻合部出血の確認の目安になることを理解しておく」と記述されていた。

2) <水分のイン-アウトバランス把握の目的>

学生は水分のイン-アウトバランス把握の目的を記述していた。

例として、「腎機能の低下もあり、尿が作られない合併症の可能性も考えられる。尿を排泄するだけでなく、腎機能の確認のためにも水分のイン-アウトバランスのチェックが必要である」と述べられていた。

3) <術後に創部の回復過程を理解する目的、術創部の観察の仕方>

学生は術後に創部の治癒過程を把握したうえで観察することの重要性に気づいていた。

例として、「術創部を観察する場合、出血、熱、発赤、腫れはないかを確認し、どのように完治していくかという流れを理解しないといけない」と記述されていた。

4) <術後に腹腔ドレーンからの排液を観察する目的、観察の仕方>

学生は術後に腹腔に挿入されているドレーンからの排液を観察する目的や、排液の色や性状について記述していた。

例として、「直腸切除術の場合の正常な色は淡血性～漿液性である。血性の場合には出血が、混濁、浮遊物の場合は縫合不全や感染が考えられるため、異常の早期発見につとめなければならない」と書かれていた。

5) <チューブ類の挿入状況の観察の仕方>

学生はチューブ類がきちんと挿入されているかを確認する必要性や、観察の仕方を捉えていた。

例として、「術直後は麻酔の影響から意識が朦朧としているため、チューブ類が抜けていないか、きちんと接続さ

れているか、何cm挿入されているかなどを観察する必要がある」と記述されていた。

6) <静脈留置カテーテルの観察の仕方>

学生は静脈留置カテーテルの刺入部の観察の仕方について記述していた。

例として、「静脈留置針は刺入部の発赤、腫脹、疼痛などの観察をする」があげられていた。

4. 【患者への説明の重要性】

学生は患者の不安の軽減や、苦痛や違和感に対して、術前、術後に患者に説明することが重要であると捉えていた。説明の内容を以下に示す。

1) <術後にチューブ類が挿入されている目的、部位、留置期間>

学生は術後患者の不安や苦痛、また意識がはっきりしないことを想定し、術後にチューブ類が挿入されている目的、部位、留置期間を説明することの必要性に気づいていた。

例として、「苦痛や違和感に対しても、患者さんに対してどのような理由でドレーン・カテーテルが挿入されているかを説明したうえで、患者さんに必要性を理解、認識してもらうことは、自己抜去の観点からも重要である；カテーテル類についてきちんと理解し、何の目的で挿入されているのか、いつ抜去できるのかを説明し、患者さんや家族に少しでも安心感を与えることが必要」と記述されていた。

2) <術後に挿入されるチューブ類のベッド上での配置場所>

学生は結果2-4) <術後患者は自分の体のどこにどのようなチューブが挿入されているか見えない>ことを考え、チューブ類がベッド上および周囲に、どのように配置されているかを説明する必要があると考えていた。

例として、「足元側のベッドサイドにドレーンバッグをつけてあるなど、患者にとって見えにくい部分はどこであるのかを理解し説明する必要がある」と書かれていた。

3) <早期離床の目的>

学生は早期離床の必要性を理解し、患者に説明する

ことが重要であると考えていた。

例として、「動いた方が回復につながることや、どこまでだったら動いてもいいのかを説明する必要がある；動いてもいいこと、できる範囲で動くことがスムーズな回復につながることを説明する」と記述されていた。

4) <清潔や食事等の日常生活、および手術部位の回復に関する術後の経過>

学生は術後、清潔や食事等が制限されることを理解し、それらについての経過を説明する必要があると捉えていた。また、手術部位の回復過程についても、具体的に説明する必要があると捉えていた。

例として、「いつになったらお風呂（シャワー）に入れるのか、口から食べられるのか説明する必要がある；腸の状態がいつ頃正常に戻り、何日後くらいから普通の食事をとることができるのかなど、できる限り具体的に説明することが大事」と記述されていた。

5) <術前の説明>

学生は、術後の患者が抱く不安に対して、自身の状態をイメージしやすいように、術前に〔術後の回復過程〕、〔麻酔の副作用〕、〔術中や術後の状態〕、〔術後にチューブが挿入される目的や留置期間、実際の状況〕、〔術後に装着する器具〕について説明する必要があると捉えていた。

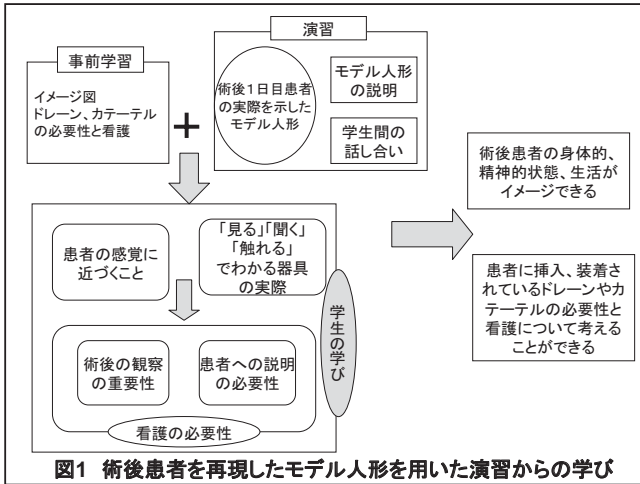
例として、「ドレーンの入っている状況がどのようなものか事前に説明し、イメージしてもらうことで、患者や家族の不安を取り除く必要がある；術後にどのような装置を着けるのか、どうしてそれを着ける必要があるのか、患者、家族に事前に説明をし、イメージを持ってもらう」と書かれていた。

V. 考 察

学生が「術後患者の実際」演習でどのような学びを得たかを図1に示す。

学生は事前学習であらかじめ知識を得て、演習では術後1日目を再現したモデル人形を実際に見て、触れて、説明を聞き、さらにグループで患者の環境や苦痛、生活について話し合った。この演習をした後に提出されたレポートを分析した結果、学生は【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】に気づくことで、【患者の感覚に近づくこと】ができ、

患者の立場に立ってその状況を受け止めていたと考えられる。さらに、【患者の感覚に近づくこと】で、【術後の観察の重要性】や【患者への説明の重要性】などの看護の必要性を感じていたことが明らかになった。



1. 事前学習でイメージをすること

「術後患者の実際」演習において学生は、事前学習で術後の患者に挿入されているチューブ類を、自己学習と自らのイメージをもとに図を描き、演習ではそのイメージ図と比較しながら、説明を聞き、モデル人形を見て、実際に触れて、グループで話し合った。学生の学びのレポートによると、<チューブ類の太さ、硬さが自分の想像と違う>、<チューブ類は自分の想像していた以上に多く、複雑に挿入されている>等、事前学習で自身がイメージした内容と比較した気づきを得られている。

事前学習でイメージ図を描く際に学生は、既習内容である、今までに見たこと触ったことのあるチューブをイメージし、図に書き入れたであろうと予測される。しかし、硬膜外カテーテルや腹腔内ドレインについては、これまでの看護学系科目では成人看護学方法で知識としては学習するものの、実物を見たり触れたりする機会がないために、イメージすることは困難であったと考えられる。そのため、学生は事前学習で、実物よりも太く硬いチューブをイメージしており、実物を見た時に「イメージしたものと違っていた」ことに気づいたのである。これは、事前学習の際にイメージした内容と、実際に見た内容との間の違いを分かったことによって、ただ見るだけとは異なり、イメージしたことが学生の中に学びとして残りやすかったので

はないかと推察される。このことから、事前学習でイメージすることは、演習で実物を見ることと連動し、学生の新たな学びにつながったと考えられる。

藤岡ら¹⁸⁾は、「授業における教授は単なる知識の伝達ではなく、学習者がそれまでの知識を手がかりにしながら、新しい知識や技術を再構成しようとする働きかけである」と述べている。このことから、「術後患者の実際」演習のように、事前に術後患者をイメージしたうえで、演習で術後患者の実際を学ぶことは、学生の過去の知識を引き出し、演習において新しい知識を再構成させるものであると考えられる。

以上のことから、「術後患者の実際」演習において、事前学習をしたうえで演習を行ったことは、事前学習と演習内容を統合させ、学生の学びに役立ったと推察され、有用であったのではないかと考えられる。

2. 患者の立場に立つこと

「術後患者の実際」演習では、静脈留置カテーテルや硬膜外カテーテル、PCAシステム、チューブ類の固定の仕方などを示すために、物品はできるだけ実物を用いるようにした。これらを、「見る」、「聞く」、「触れる」という感覚を使って演習することで、<チューブ類の太さ、硬さが自分の想像と違う> <チューブ類は自分の想像していた以上に多く、複雑に挿入されている>等、患者の身体的状態につながる内容に気づいたと考えられる。このことを【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】と示している。そして、学生はチューブ類の硬さや太さ、複雑さを感じたことで、「もし自分だったら」という視点で術後患者がどのように感じるかを考えたのではないかと推察される。さらに、手術が患者の精神面や生活にどのような影響を与えているかを学生間で話し合ったことで、<術後患者はチューブの挿入によって身動きがとれない>、<術後患者はチューブの挿入によって苦痛や違和感がある>、<術後患者は手術を受けたことによって不安を抱く>等、患者の精神的状態や生活につながる内容を捉えたと考えられる。これらを【患者の感覚に近づくこと】と示している。

以上のことから、学生はモデル人形を見て、挿入されているチューブ類から【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】に気づき、そこから【患者の感覚に近づくこと】すなわち患者の立場に立つこ

とで、患者の苦痛や不安等、精神的状態や生活を含めて術後患者をイメージしていたと考えられる。

このように感覚を使った体感的学習について、藤岡ら¹⁹⁾は体感的学習とは、模擬的な状況を設定し、学生がその状況とかわりながら実践的に経験する場としての演習で、その状況を身体で感じて対応する学習である、と述べている。「術後患者の実際」演習でも、学生が「見る」、「聞く」、「触れる」ことによって、術後患者の状況を自身の感覚で感じ、【患者の感覚に近づくこと】で、苦痛や不安を患者の立場に立って捉えていた。学生が実際に模擬的な状況とかわりながら学ぶ体感的学習によって、学生の身体感覚は刺激され、そこから患者の立場に立つことで、苦痛や不安がある状況をイメージし、講義ではできない学びを実感できたのではないかと考えられる。

「術後患者の実際」演習は、「術後の患者の状況をイメージし、患者の身体的・精神的状態と生活について考えることができること」を目標としていた。看護過程を展開していく中で、紙上事例をどこまでイメージ化（具体化）できるかが患者像の理解に直結すると考えられるが、3年次生は、演習を行う前期の時点で臨地実習を2回しか経験しておらず、術後の患者の状況をイメージするのは困難と考えられる。また、術後の患者は生命の危機的な状態にあり、患者の身体的情報に目がいき、精神面や生活について捉えにくいと考える。前述した学びの内容から、学生は「術後患者の実際」演習を通し、術後1日目の患者の状態をイメージし、さらに患者の立場に立って、身体的・精神的状態と生活について考えることができおり、この演習における学習目標は達成できたのではないかと考えられる。

3. 術後の看護の必要性

「術後患者の実際」演習で学生は事前にイメージ図を描き、ドレーン、カテーテル類の必要性と看護を学習し、「見る」、「聞く」、「触れる」感覚を使って演習することで、【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】に気づいた。そこから【患者の感覚に近づくこと】ができたことで、患者の不安や苦痛をイメージし、【術後の観察の重要性】、【患者への説明の重要性】という2つの看護の必要性を見出している。

「術後患者の実際」演習の目標のひとつとして、「事前学習をふまえて、患者に挿入、装着されているドレーンやカテーテル類の必要性およびその看護について考えることができること」をあげている。ドレーンやカテーテル類が挿入されている患者の看護として期待されるのは、排液の観察やドレーン・カテーテルが挿入されている部位の観察、不安や苦痛への援助²⁰⁾であり、学生の学びにはそれらの項目があげられている。特に【患者への説明の重要性】については、患者の立場に立って苦痛や違和感、不安をイメージしたことで、その問題を解決するために必要な援助、つまり「具体的に説明する」という看護を捉えている。その記述内容は、＜術後にチューブ類が挿入されている目的、部位、留置期間＞、＜清潔や食事等の日常生活、および手術部位の回復に関する術後の経過＞等、ドレーンやカテーテル類の必要性や看護をふまえ、非常に具体的であった。これは事前学習をもとに、学生が患者の立場に立ってその援助を考えることで、様々な場面を想定し、具体性のある内容につながったためと考えられる。

また、【術後の観察の重要性】では、＜術後に循環や呼吸状態を観察する目的、観察の仕方＞、＜水分のイン-アウトバランス把握の目的＞、＜術後に創部の回復過程を理解する目的、術創部の観察の仕方＞、＜術後に腹腔ドレーンからの排液を観察する目的、観察の仕方＞等があげられている。これも【「見る」「聞く」「触れる」でわかる器具の実際】に気づき、チューブ類が挿入されている患者の立場に立って考えることで、必要な観察内容を導き出したと考えられる。

この演習において、事前学習課題として「ドレーン、カテーテル類の必要性とその看護」について提示しただけであったが、学生の学びの内容には、術後の循環や呼吸状態、創部の回復等、課題以外の内容についてもあげられている。演習では教員が説明する中で学生に質問をし、事前学習の内容を確認したが、教員の説明内容に術後の循環や呼吸状態の観察等については含まれていなかった。つまり、課題を与えられていなくとも、事前学習と演習から、さらに発展させた学びを獲得している学生もいるといえる。したがって、演習内容に術後の循環や呼吸状態、創部の回復等についても入れることができれば、学生にとってより有意

義な演習になるのではないかと考える。

今回の「術後患者の実際」演習は教員の一方的な説明にならないよう、学生に質問しながら説明を進め、モデル人形を「見る」、「触れる」時間をつくりながら行ったが、中心となったのは教員の説明であった。今後、循環や呼吸状態等教授する内容を追加して演習を行った場合、現在と同様の方法であれば、演習時間が不足し十分に「見る」、「触れる」時間がとれなくなる等の問題が生じると予測される。したがって、必要な内容を効果的に学べるような演習方法の検討が求められる。藤岡ら²¹⁾は授業を教師からの一方的な知識、情報、技術の伝達過程ではなく、相互解釈的なコミュニケーション過程であり、教師と学習者の主体的、創造的協同な努力という協同の中で、それぞれにとっての意味が形成されていく場である、と述べている。また、さらに藤岡ら²²⁾は、学習者が主体的に学習を進めていくためには、関心・意欲・態度の部分に刺激し、学習者が思考できるような環境を構成していくことが求められる、とも述べている。ここにあるように、今後は演習を教員からの一方的な伝達の場ではなく、学生が主体的に教員とコミュニケーションをとりながら学習できるような場にする必要があると考えられる。つまり、演習に学生の主体性を取り入れ、関心・意欲・態度の部分に刺激するため、演習方法に「見る」、「聞く」、「触れる」に加え、患者を観察する等の「看護を実践する」ことも取り入れていく必要があると考える。

本演習の学習目標は、「事前学習をふまえて、患者に挿入、装着されているドレーンやカテーテル類の必要性およびその看護について考えることができる」であった。【術後の観察の重要性】からは、提示された事前学習の課題以上の内容を学んでいる者もあり、【患者への説明の重要性】からは、事前学習をふまえて患者の立場に立つことで、様々な場面を想像し、具体的な説明内容を導き出すことができていた。以上のことから、ドレーン・カテーテル類の必要性、および観察や不安・苦痛への援助等の看護については、事前学習と演習から学ぶことができており、学習目標は達成されたのではないかと考える。

VI. 結 論

「術後患者の実際」において学生がどのような学

び、気づきを得たかを明らかにすることを目的に、本研究に取り組んだ。学生の学びの内容から、以下のことが明らかになった。

1. 事前学習で術後患者の状況をイメージし、「見る」、「聞く」、「触れる」という感覚を使って演習を行ったことで、事前学習と演習内容が繋がったと考えられる。
2. 学生はモデル人形を見て、挿入されているチューブ類から【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】に気づき、そこから【患者の感覚に近づくこと】すなわち、患者の立場に立つことで術後患者をイメージしていたと考えられる。
3. 「術後患者の実際」演習で学生は事前にイメージ図を描き、ドレーン、カテーテル類の必要性と看護を学習し、「見る」、「聞く」、「触れる」感覚を使って演習することで、【「見る」、「聞く」、「触れる」でわかる器具の実際】に気づいた。そこから【患者の感覚に近づくこと】ができたことで、患者の不安や苦痛をイメージし、【術後の観察の重要性】、【患者への説明の重要性】という2つの看護の必要性を見出していったと考えられる。

【引用文献】

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、看護教育、43(5)、411-431、2002。
- 2) 平木民子：看護学教育における臨地実習前の学内演習の意義－日本赤十字広島看護大学のカリキュラム－、Quality Nursing、8(10)、818-822、2002。
- 3) 鈴木純恵、他：看護学教育研究実践への提言 看護学教育の教育方法に関する研究動向と今後の課題・2－演習・体験学習等に関する研究に焦点を当てて－、看護教育、35(11)、891-895、1994。
- 4) 藤岡完治、他：看護教育の方法、p102、医学書院、2002。
- 5) 藤岡完治、野村明美編：わかる授業をつくる看護教育技法3 シミュレーション・体験学習、医学

- 書院, 2000.
- 6) 清水妙子, 他: 周手術期看護における看護診断を取り入れた看護過程演習の実際-学生の自己評価と教師評価の分析をとおして, 看護展望, 29(6), 92-96, 2004.
 - 7) 鈴木里美, 他: 周手術期における看護過程演習の実際-臨地実習につなげる看護診断の活用を目指して-, 看護展望, 26(11), 1227-1239, 2001.
 - 8) 大屋演子, 他: 学生の知識の統合を促す看護過程演習-自己学習能力を高める演習方法-: 看護展望, 28(3), 388-396, 2003.
 - 9) 河部房子, 他: 当事者参加を取り入れた看護過程展開の演習の企画・実施報告, 千葉大学看護学部紀要, 29, 43-48,
 - 10) 植田喜久子, 他: 日本赤十字広島看護大学のプログラムから 看護実践能力を高めるための学内演習の実際: 成人看護学, Quality Nursing, 8(10), 18-24, 2002.
 - 11) 岩崎優子, 他, 模擬患者を用いた周手術期の看護過程演習における学生の学び, 日本看護学教育学会誌 学術集会講演集, 18, p227, 2008.
 - 12) 谷田部幸子, 他: 模擬患者を用い, 患者の状態の違いを提示する周手術期学内演習の効果, 日本看護学会論文集 看護教育, 38, 18-20, 2007.
 - 13) 遠藤みどり, 他: 周手術期看護の演習終了後における学生の学び -倫理的視点からの内容分析-, 山梨県立看護大学紀要, 7, 51-62, 2005.
 - 14) 山本裕子, 他: 模擬糖尿病患者利用した慢性看護学演習の効果と課題, 大阪府立看護大学看護学部紀要, 12(1), 1-10, 2006.
 - 15) 上田稚代子, 他: 成人看護学(周手術期)におけるストマケアのロールプレイに関する学習効果, 和歌山県立医科大学看護短期大学学部紀要, 7, 49-56, 2004.
 - 16) 浅見多紀子, 他: 成人看護演習における教材の工夫と学生の学習効果, 埼玉医科大学短期大学紀要, 10, 55-61, 1999.
 - 17) 松村三千子, 他: 成人看護学授業における疑似体験学習の重要性 片麻痺患者体験と対象理解の関係, 看護教育, 43(2), 128-133, 2002.
 - 18) 前傾4), p 62
 - 19) 前傾4), p 105
 - 20) 青木照明, 他編集: 系統看護学講座 別巻1 臨床外科看護総論, p 390, 医学書院, 2008.
 - 21) 藤岡完治, 他: 臨床実習における教育的関わり, 藤岡完治, 他監修, 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版, p 45, 医学書院, 2007.
 - 22) 前傾4), p 161.